

豊原 ①五 ②五 ③ニコライエフスク、ナホトカ、セミヨノフカ、イマン、ムリー ④大泊

大泊 ①九 ②七・五 ③北樺太、ナホトカ、ムリー、モスクワ ④半田、大泊

上敷香 ①一 ②一 ③セミヨノフカ ④大泊
幌筵 ①一〇 ②八・五 ③ニコライエフスク、

ナホトカ、ウラジオ、ムリー ④大泊

占守 ①一六 ②一四 ③カムチャッカ、ウオロシロフ、マガダン、ネムリー、スーチヤン、

アルチョム ④占守、大泊

松輪 ①三 ②二・八 ③ムリー ④大泊

得撫 ①六 ②五 ③ムリー ④大泊

色丹 ①八 ②六 ③ムリー ④大泊

択捉 ①二三 ②二一 ③ムリー、ウラジオ ④大泊

合計 七一大隊 六〇・八千名

このほか憲兵・警察・技術・衛生関係者等で作業大隊に編入されないで、カムチャッカ半島（一部ハバロ

フスク）に送られた者が約五〇〇名、受刑後本土へ移送された者等で作業大隊とは別個に入ソした者が約六、〇〇〇名ある。

気象隊という部隊

愛知県 森 由 治

〔はじめに〕

私の所属した部隊は気象隊という特殊な部隊であり、沖繩・ニューギニア・フィリピン・ビルマ等で数多くの戦死者を出してはいるが、歩兵部隊のような地上戦闘による、直接犠牲者を目前にしての労苦ではない。気象隊は後方勤務と見られ、直接戦闘にはタッチしないのが建前だからである。しかし、多くの人々にはほとんど知られていない気象隊の実態を書き残すことも、必要なことではなからうかと考える。

一、豊川海軍工廠と職業安定所

家が貧しく子だくさんのため伯父の家で育てられ、

昭和十五年旧制中学校を卒業した私は、伯父の家業（芸技置屋）を継ぐ必要があったことから開廠間も無い地元の豊川海軍工廠に入廠した。工廠での仕事は、工費の単価計算の基礎データを作る機銃工事費記録員で、独特の算用数字の書き方を教わった。まだ出来たばかりのことで、工廠の沿革史の資料として「本野が原」の歴史的資料集め等も手掛けた。少年工もたくさんいて、宿舎から引率されて実習に来ていた。工廠もまだまだこれから大きくなる場所であった。

伯父も死に、豊川に住まなければならぬ必要も無くなった矢先、徴用制により転職は出来なくなるということを聞いた。当時は「青雲の志」に燃え、芸技置屋の主人に納まることなど快しとしなかった。陸軍士官学校を受験するためにはこのまま此処に勤めていては合格の見込がないからと、理屈を言っただけで工廠をやめさせて貰い、名古屋に出た。

しかし、働かないことには生活出来ないので職業安定所に出向いたところ、取り敢えず此処で働いたらどうか、ということ、臨時職員として勤めることにな

った。

安定所の仕事は今になって考えると、多分「国民徴用令」による「出頭要求書」の発送準備で、国家が重要と認める産業や軍に強制的に就かせるために出来た手帳だと思われる「労働者手帳」（職業能力申告手帳）の記入であった。その時扱った手帳は鳶職の人達のものが多かったことだけが記憶に残っている。何時までも臨時ではということ、県庁へ面接に行ったが、腰掛け的な勤務では困ると言われ、此処にも長くはいられない、と考えていた時に、気象技術要員のポスターが目についた。魅力は食う心配をしなくても良いことと、成績が良ければ中央気象台所属の測候技術官養成所（旧制専門学校）に陸軍委託学生として官費入学出来るということであった。早速応募し、再び軍属として「陸軍気象部」に入部することにした。

二、気象技術要員

昭和十六年三月、第八期「陸軍気象技術要員」として、陸軍気象部の門をくぐり、いよいよ腰掛けではなく、気象技術者としての第一歩を踏み出したのである。

軍属となった私達は氣象部の幹旋する下宿から毎朝通勤することになった。学生服のボタンを指定のものと取り替え、帽子に提要の記事を着けて、拳手の敬礼をして衛兵所を通るわけである。中学四年から応募した者は満十五、六歳であった。

約一五〇名の教育が始まった。身分は筆生、日給一円二十銭。ガリ版刷りの氣象教程を渡され氣象学の入門から、氣象観測、統計、天気図記入の実習とモジュール記号の暗記等々ビッシリつまった日課が消化され、途中から予報と通信の二班に分けられ、私は予報班に入った。宿題もあつたが、測候技術官養成所受験に備えて、数学の勉強をしたり、岡田博士の氣象学を買って読んだりもした。教官は甲幹二期終了の少尉で、助教として乙幹一期終了後氣象部付となった候補生及び第二課の雇員が直接間接に私達の教育や日課予定や生活面での面倒を見てくれた。

昼食は勿論部内の食堂で食べたが、食糧は切符制になつており、朝・夕食は指定の食堂ならば伝票で食べることが出来た。日曜日に新宿まで遊びに出たが、金

がなくなつて食事のために指定食堂まで帰つて来なければならぬこともあつた。

基礎教育が一段落したところで、第一回の野外演習が千葉県九十九里浜の飯岡演習廠舎で行われた。軍服を貸与され、内務班が編成され、起床、消灯総て兵隊と同様な生活で、違ふのは戦闘訓練の代わりに、露場（氣象観測をする場所）百葉箱、風向風速計等観測機材を設置する所）開設、定時観測、観天望気、高層風観測（気球を追跡して風向風速を測定する）、ラジオゾンデによる高層氣象観測、発煙筒を使った逆転層観測、太平洋を望んでの波頭計算等々を行うことである。態度が太いとか、タバコを吸つたとかで、夜、気合を入れられた者も数人いた。期間は一週間位だったろうかはつきりしない。

昭和十六年七月七日、いつものように氣象部に行つてみると、何か様子が変わつていて、一向に講義も始まらず、助教も顔を見せない。午前中何もせず講義室でがやがや言つて待っていると。急に、

「命令を伝えるから集合」

と、言われ中庭に集合した。同期生約一五〇名中一〇〇名近くが第二十五野戦氣象隊（以下「二五野気」と略記）配属を命ぜられた。「二五野気」が何のために、何処に行くのか見当もつかない。

「下宿が乱れていては武人の恥になるから、同室者に手伝って貰って、私物の整理をし故郷に送り返せ。夕刻までには全員帰って来い。」

と言われ、急遽下宿の整理をしたのが娑婆とのお別れになった。

氣象部に帰ってみると、正面本館前に天幕が張られ氣象機材が積載され、正門脇の小テントには臨時の受付が設けられ、面会者の応対に当たっていたようである。東京近郊の者たちは近親者との面会を許されたように記憶している。借行社の職員に寸法を取って貰って文官服の注文をした。慌しい中で着ているものまで一切の私物は一まとめにして郷里に送った。軍服が支給され巻き脚絆を着けた初年兵姿そのままの軍属が出来上がった。氣象関係の書物や教科書は仏印でも開いて見たおぼえがあるので、少々の私物の携行は許可された

ようである。

郷里に知らせても、山の中から出て来るのでは到底間に合わないことは判っていたので、この手紙が着く頃にはもう内地にはいない。多分船の上だろうといった簡単な手紙を親元に残しただけで心残りはなかった。肉親とは幼い頃から離れ離れに過ごしていたためであろう。しかし、兵隊であつたら、「祝入営」とか「祝出征」と書いた幟を立て村人たちに囲まれ晴れがましく出掛けたことであろうと、いささか寂しい気持ちにさせられた。

三、第二十五野戦氣象隊動員下令

後日知ったことであるが、大本営は昭和十六年六月二十四日、南部仏印進駐のため、第二十五軍の編成を發令（司令官飯田祥二郎中将）、第七飛行団司令部、第十四（重爆）、第十五（偵偵）、第二十七（軽爆）、第六十四（戦闘）の各戦隊を指揮下とし、多数の航空部隊（主として地上勤務）を隷下とした。その中の一つが「二五野気」であった。「二五野気」は基地の氣象勤務の外、開戦直後の中枢放送（南方各地の氣象デ

ーターを収集し放送すること」と開戦時の気象判断をするという重大な任務があった。部隊長は気象部の通信班長であった三谷太郎少佐、将校は甲幹二期の少尉、教育中の甲幹四期の見習士官、下士官は乙幹一期の教育を終了した候補生が主力で、外に各航空教育隊から転属になった、通信、自動車手の兵隊がいたが、気象業務に直接携わる者は私達教育半ばの技要八期生を主力とし、若干の気象部に勤務中の技手と雇員を加えた軍属であった。二百数十名の一個中隊程度の部隊であったが、陸軍気象部で編成（後にも先にも気象部で編成された部隊は外には無く、気象教育を受けた人員をこれだけ多数一度に投入した部隊も無い）された優秀部隊であったと、自他共に認めている。

七月八日は観測、通信機材、武器弾薬等の梱包整理をし、秘匿行動のため夜間に軍用列車に積載した。小人数の部隊であるが、十数輛のトラックをはじめ、部隊本部の中樞業務用機材、展開すれば独立行動を取らなければならぬ、高層気象観測班を含む五個測候班分の機材（気象隊ではこれが重要な兵器である、中に

は気球用の水素ボンベ数十本も含まれている）は三千梱にもものぼる大変な数で、専用の特別仕立ての貨車を必要とした。積載作業は将校、下士官は命令する側になるので兵隊のほとんどいないこの部隊では総て軍属の仕事となる。

七月九日午前三時、気象部内の一部の人達に見送られて中野駅を出発した。主要駅にはほとんど止まらず悪く言えばコソコソと宇品に向かった。七月十日午前六時頃宇品港に到着。機材を軍用船「東福丸（五千六百トン）」に積み込む仕事は、中野駅にも増して大変な仕事だ。

七月十二日、宇品出港、給水のため若松港に立ち寄り、広東に向かう。勿論この時点では何処に向かうのか、これからどんなことが起こるのかは幹部以外には知らされていなかった。玄界灘は大荒れで、時々スクリューの空転音が響いてくる。船倉は少しでも多くの人員が輸送できるように、お蚕を飼う棚のような感じになっており、立ち上がったりますれば、いやというほど頭を打つ。皆船酔いで、副食は毎回南瓜ばかりとあ

って食事はいらぬという者が続出する。比較的元気なものが毎回飯(めし)上げをした。

四、黄埔駐留

八日間の航海を終え七月二十日、南支那、広東の外港黄埔港に到着した。機材を揚陸し、駅のプラットホームに積載。兵站宿舎が仮住いとなる。三八式の騎兵銃や帯剣を渡され、階級証だけが違う初年兵となり、兵隊と寸違わぬ生活が昭和十九年十月まで続く。黄埔では水が何よりも大切で、漁船を改造した給水舟が台湾から運んでいるとの話で、兵站の中心に飲料水用のドラム缶が並べられ水盗人の監視に着剣した当番が付く程であった。

また、占領下とはいえ、治安は悪く機材を集積した駅のプラットホームにも衛兵所が設けられ、勤務に着くのは軍属であった。時々衛兵が銃撃されたという話も聞いた。

七月二十七日待つこと久しかった私たちは第二十五軍の南部仏印平和進駐第二梯団として「伊太利丸」に乗船、黄埔出港、八月四日サイゴンに上陸した。

五、サイゴン駐屯地

先発隊によって設営されたジャーデン地区の駐屯地に入った部隊本部は、直ちに中枢業務開始準備、展開候班の編成に着手。高層氣象観測班一、測候班三、サイゴン飛行場協力班の編成を行った。ここでは、暑さに慣れないため皮膚病(インキン・タムシ)に悩まされた。タムシといっても、物凄い繁殖力で十円玉位のものがアツという間にどんどん広がって、腹部に出来たものがやがて背中握手するほどに大きくなり、高熱を發して苦しがるという代物である。医務室は満員になり、部隊長も何度も見舞いに来て「我慢して頑張れよ」と励ますほどであった。

六、コンポントラッシュ展開

「二五野気」は八月下旬から九月上旬にかけて、高層班(ブロンベン)、第一(コンポントラッシュ)、第二(セムレア)、第三(ツーラン)と飛行場協力班(サイゴン、タンソニット飛行場)の五個班を展開させた。私達は第一測候班(長見習士官一、下士官四、兵五、自動車手二、通信二、氣象一、雇員、計二十名)

勤務を命ぜられ八月二十九日、コンポントラッシュに到着。直ちに勤務を開始した。この宿舎は屋根裏部屋（二階が仮眠所（一階は土間のため）で、やはり皮膚病に苦しめられた。しかし、これは、免疫が出来るのか三ヵ月位してからは、さほどひどくはならず、次第に直っていった。

最初に電文を作成し、それが電波に乗った時と、十二月八日の開戦の電文を解読した時は、いささか緊張した。夜間勤務があるので、三交替で勤務し、下番の時に命令電文の解読や天気図作成をした。開戦後は特にシンガポール攻撃の、重・軽爆（主としてブノンベより出撃）援護のための戦闘機隊に直接協力をした。開戦と同時に気象管制が敷かれ分厚い暗号乱数表を使用しなければならなかったため、その分、仕事量が増加した。

ここで、気象軽視についてふれておきたい。それは、開戦日の決定である。私達はこの決定には「二五野気」の長期予報が大いに役立ったものと思っていた。なぜなら、九月に入って中央気象台長藤原博

士を大本営陸軍部の囑託とし、「サイゴン二五野気」に台湾気象台長西村博士を呼ぶなど力を入れていたからである。ところが、開戦日決定のための長期予報は、上層部では聞き置く程度にしか扱われず、十二月八日は気象隊がどう言おうと、動かし難い決定事項となっていた。と、参謀部付気象将校から後で聞かされた。

七、ビルマ進攻

当初はマレー進攻作戦を容易にするため、タイ国に進駐し、側背援護を狙ったビルマ作戦も、マレー作戦の予想外の進展に伴い、重慶軍・連合軍の撃滅、援蔣ルート（の封鎖と、逐次拡大し、「二五野気」も仏印、タイの気象資料は現地機関から入手することとし、北・中・南支那気象隊からの転属者で増強し、ビルマに展開することになった。

コンポントラッシュを撤収した私達は、昭和十七年一月九日～二月二十日、タイ国ランパンに展開。その後、二輛のトラックでタイ国西端ラヘン↓メソド道路から日本軍によって急遽開かれた唯一のビルマへの自動車道路を通じてモールメンを目指す。山膚を削り取

ただだけの道は極めて細く、一方通行の一車線、土埃が立ち運転を一步誤れば千尋の谷底へ転落する。エンコでもすれば後続車のために車は谷底へ転がす以外に方法は無い。モールメンに着いたときは全員面を着けたように顔一面に埃が溜っていた。

直ちに飛行場に展開したが、いまだラングーン陥落前のことで、街には人影もなく、敵機の空襲もあり、銃撃も受けた。しかし、何と言っても緒戦の破竹の勢いがあり、撤退時のような悲惨なことはなかった。戦友はさらにアキヤブに展開したが、私はマラリアに罹りラングーンの「二五野気前進本部」でぶらぶらしていた。

しばらくして、気象第四中隊がジャワから転進しビルマ担当となった。この転進については、少佐に進級しても何時までも中隊長であることに不満を持った隊長がバンドン市中を遊び歩いていたことが上層部に知れ、そのための左遷である。と噂された。同じ戦場でも「ジャワは天国、ビルマは地獄」と言われたほどに差がある地へ、隊長の私的行為から部隊移動が行われ

たとすれば、二百数十名の部下こそ、いい面の皮である。勿論それだけでは無く、ビルマ戦線は極度に拡大され、私達より一歩先にビルマ入りした測候班は最前線の地上部隊を追尾し（時には地上部隊よりも前線に出て包囲されたこともあるという）ミイトキーナまで前進していた。

「二五野気」だけでは航空隊への協力が出来ず、何等かの手を打たなければならなかったこともあげられるであろうが、兵員輸送の面等を考えれば、ジャワからビルマへの転進が最良であったかどうかは疑わしい。昭和十七年九月、大東亜全域の気象部隊を整理統合して、気象連隊を新設。南方派遣の気象隊は第三気象連隊となり、（九月三十日編成完結）その展開地域は比島、ニューギニア、豪北地区の一部を除き、西はビルマから東はチモール島に至る地域に及んだ。気象中枢業務（主なものは気象放送）は逐次サイゴンから昭南に移されることになった。

「二五野気」主力は「三気連二大隊」本部（ラングーン）仏印担当と五中隊（サイゴン）仏印・タイ・南

部ビルマ担当になった。私はアキヤブを撤収して、ビルマ最南端に展開する、第五中隊三股隊（旧「二五野気」第一測候班）に復帰した。ピクトリヤポイントは陸の孤島で、ラングーンから海路でペナンへ、そこからマレー鉄道でタイ国チュンポンへ、さらにトラックでパクチャンまで、それからが大変だ。小船でパクチャン河を河口まで下るしか道はない。多くの機材とトラックを積んで行かなければならないのだ。小舟にある重い水素ボンベを乗せるには、足場が悪くて二人で運ぶことが出来ない。人間いざとなればトンデモナイ馬鹿力が出るものだ。一人で背中に背負って運ぶことが出来た。小舟を二艘つなぎ合わせトラックを積み込み、今にも沈没しそうな舟の縁にしがみついき、ワニの泳いでいる河を下ること約八時間。やっとの思いでピクトリヤポイントの棧橋に着いた。

トラック輸送の時、雨に打たれ通しだったのがたつて今度は中耳炎になってしまった。私達の勤務する飛行場は港の部落から四キロほど離れた所にあり、警備隊の医務室は港にあったので、二、三回ビルマで押

収した隊長用のオースチンで送り迎えをしてもらったが、どうにも目が回るので、部落の現地人の医者所へ半月程入院した。

八、サイゴン中隊本部

昭和十八年四月、一年八ヵ月ぶりに出先勤務を終え、進駐当初の駐屯地サイゴンに復帰した。連隊が出来、本部業務は昭南に移されても、「二五野気本部」が中枢業務を行っていたことと、仏印、タイの気象資料収集の業務が残っていたため、他の中隊本部より業務が多かった。私は統計班勤務（過去の気象資料を整理したり、気象月報を発行する）となり、スタッフは僅か四名で、毎日ガリ版印刷をして、製本をするという事務的な仕事になった。ここで習得した三角定規を使つての孔版技術の習得は復員後も大変役立った。

長く続いた夜間勤務から解放され、昼間みの勤務となったが、その分、使役集合、飯上げ集合、衛兵勤務と私達にとっては雑用が多くなった。兵隊の長期勤務者は除隊のため、連隊本部に集結し内地に帰還した。代わつて中枢業務のための軍属と展開班に補充するた

めの兵員が内地から補充された。私達大正十一年生まれのものは、願いもしないのに、徴兵延期願を書かされ内地帰還は夢と終わった。内地出発直前に注文した文官服が届いており、外出時には着用が許された。長靴はタイ国ランパンで仕入れて来たが、軍刀は無いので仲間のものを借用して得意になっていた。夕方帰隊すると、内地から来たばかりの兵隊が敬礼をしてくれたが、古参兵に教えられ翌日からはしなくなった。俺達だって少なくとも一年以上は古参なのだぞと少々腹立たしく思った。

九、連隊本部勤務隊

昭和十九年一月、兵員の除隊、補充、連隊内の改編等があり、動員当時から軍属のほとんど（前線勤務のため遅れた者もいる）が、連隊本部勤務隊付（昭南勤務）になった。善意に解釈すれば、兵隊を前線へ軍属は後方勤務にということになるが、悪く考えれば早く兵隊にして、再び前線へということになる。初年兵として入営させる準備でもあった。

昭和十九年に入るとインパール作戦が開始され、当

連隊第四中隊からも二つの挺進測候班が編成され、それぞれコヒマ、インパールに向かった。大変な苦勞が待ち受けていたのである。二月のメイミョー軍司令部における第十五軍、三十三軍の最終合同作戦会議で氣象隊は、

「本年のビルマ方面の雨季は例年より早く河川の水量が急増するので、兵員、物資、弾薬を速やかにチンドウイン河以西に搬出するよう」

具申したが、いらんことを言うなとばかり辻参謀に一蹴された。氣象隊の者は皆、数万の将兵の犠牲を伴ったインパール作戦は、軍司令官、地上軍幹部の氣象輕視、ビルマの雨季に対する認識の甘さが悲惨な結果を招いたと認識している。

昭南には八日市で速成教育を受けた、若い軍属が二〇〇名近く到着していた。広大な守備範囲に対する対策として、連隊長の要請に応じて急遽内地から送り込まれた者達であり、私達と交替にラングーン、サイゴンに送られた。それでも、「軍隊は連隊」と言われ、「三氣連」に配属された者はまだ幸運であった。彼等と同

時に比島に送られたものはほとんど戦死している。連隊改編に伴いマレー半島スゲイバタニからスマトラ転進の命を受けた第一中隊内藤小隊は海上トラックに乗船、二月二十八日ベラ湾に向かう途中、敵潜水艦の攻撃を受け戦死者、戦傷十数名を出し、続く二十九日に再び魚雷攻撃を受け全員戦死した。

昭南では、入営予定者は特別な内務班に入れられ、軍人勅諭の暗記等入営準備教育が行われた。勤務は二交替制で、氣象報解読のための乱数書き出しを主に、天気図記入、将校が作成した天気図の清書、印刷等であつた。来る日も来る日も乱数ばかり読んでいたので、寝言に大きな声で乱数を読む者もいた。八月三日にはビルマ、ミートキーナ小隊が守備隊と行動を共にし全員玉碎した。

十、現地入営

昭和十九年十月一日、やっとのことで陸軍雇員（判任官待遇）、営外居住となつた。三年余に及ぶ外地勤務者への軍のせめてもの罪滅ぼしといった感じである。しかし、それは僅か十日間で終わり、惨めな初年

兵教育が待つていた。十月十日、今までは扱いは最下級でもメンコの数で威張つていた私達も、初年兵となつてはどうにもならない。なまじ同じ部隊であることが気持ちの切り替えに災いし、何と哀れなことかという思いばかりが先に立つた。

教官は歩兵予備士官学校で鳥嶼守備隊長になるための特訓を受けた見習士官で、いざ南方に来てみたら、守備すべき島は既になく、思いもかけず氣象隊に配属になり、書いたことなど無い天気図を書かされ、雇員に笑われていた矢先、オハコの軍事教練の教育である。班付は（全員ではなく中には大変人間味溢れる人もいたが）軍隊好きの下士候上がり上等兵は、こんな民間人の集団のような部隊は快く思っていない。皆んな水を得た魚のように張り切つてシゴいてくれた。蟬柱にしがみついてミーンミンという、鶯の谷渡り（長椅子間の腕立て伏せ）、各班回り（どうして気合を入れられているのか大きな声で申告して回る）等一通りの教育はして貰つた。救いは、そんな教育が僅か二十日そこそこで済んだことである。

前線では猫の手も借りたい程初年兵の到着を待っていた。しかし、悪いことに幹部候補生の試験を受けてしまった。幹部教育が始まったがもう気象教育などと言つてはられない戦況で、戦闘訓練や無線室用の防空壕掘りをやらされた。教官はガスが得意で演習で少しへマをすると、すぐ防毒面を着けた駄け足をやらされた。匍匐前進の時には大きな黒蟻に刺されるのでたまらなかつた。

それでも二十年四月一日には上等兵の階級に進み幹部に採用され、五月二十日には甲幹部になった。八月一日には軍曹の階級に進み中隊配属も決まっています、間もなく見習士官になろうという時に終戦を迎えた。

十一、戦争終結から復員まで

八月十五日の陛下のラジオ放送は混信が多くほとんど聞き取れなかつたが、ひそかに極秘情報やカルカッタ放送等を受信している者の話を聞いていたので、敗戦は了解出来た。直ちに終戦の事務処理が開始され、八月二十三日、連隊本部、本部勤務隊、材料廠の約四〇〇名は残留、申し送り要員（約四〇名）を除いて二

十四日午後十二時までにシンガポール島から退去するように命ぜられ、自分の間の食糧、医薬品等最小限の荷物をリヤカーや荷車に積み、徒歩行軍でジョホール橋を渡った。道路わきのゴム林で野営してはさまよえる羊のようにマレー半島を北上した。

九月十一日、やつとジョホール州ジョロトンに到着、ゴム林を臨時駐屯地とするバラックの生活が二ヵ月程続いた。その間に多くの者が作業隊で働かされた。日本人は請け負いが得意でどれだけの仕事をすれば良いか交渉するのだが、彼らは仕事量が問題ではなく、能率は上がらなくても決められた時間は作業をしていなくてはならない。暑い飛行場で一日中草取りをさせられて参った。巡察が来たら知らせるから草など取らなくてもそこにしゃがんでおれ、合図をしたら草取りをすればいい。と言った案配で、監視はインド兵であった。

クルアンの英印軍の検問場で十一月二十四日に検査を受けた。検査に先立って写真、手紙、日記類、貴重品などを持っていると戦犯の疑いを掛けられ全員が迷

惑するから、全部焼却するようにと言われ全部焼き捨てた。タイ国で仕入れた象牙の印材や籠甲等も穴を掘って埋めた。それでも時計や私物位はと持っていた者も検問場の道路の両側で巡視していた英印軍に取られてしまった。連隊長は戦犯の疑いを掛けられ留め置きになった。

二十年十一月二十五日、ケッペルハーバーから乗船、無人の島レンパン島に運ばれた。全くの島流しである。押して切る鋸と軍刀を折った代用品の鉋で住居を作り、食糧を貰いに行くために道を造り、病院を建て一日分の食糧を三日で食べるため腹をすかし、栄養失調のため足は上がらず、ついには死者まで出てしまう生活が六ヵ月続き、食糧自給のために畑を開いて植えたタピオカがもうじき食べられるという時に待ちに待った復員の日が来た。五月二日のことである。

五月十八日、名古屋港に上陸。十九日、それぞれの故郷に向かった。

〔終わりに〕

開戦前から終戦後まで五年に及ぶ外地勤務は一体何

だったのだろうか。お国のためと一途に信じ、青春の熱い血をたぎらせて、精一杯生きて来た。一生の仕事にしようと思った気象の仕事も復員者が溢れ、私達のような下級技術者は気象台では使ってくれなかった。大事な青春時代を無為に過ごし、何と無く中途半端な一生になってしまったと今でも思っている。

【解 説】

南部仏印進駐に先だち、昭和十六年六月二十四日、第二十五軍が編成されたが、第二十五野戦気象隊は七月七日動員下令され、第二十五軍隷下航空部隊の戦闘列に加わった。部隊長は陸軍少佐三谷太郎、総員二一六名であった。

第二十五野戦気象隊の作命第一号は広東省黄埔に於いて下され、八月七日黄埔出港、十一月仏印サイゴンに上陸した。以来、南方兵要気象資料の収集に努め、かつ戦力の補強をはかった。

開戦日の決定は長期気象予報によらなければならぬ。十一月、大本営は南方軍（五日令甲第七九号により編成）に対し十二月上旬、

「航空撃滅作戦に適する開戦日を選定し意見具申すること。併せて陸軍氣象部、中央氣象台、台湾総督府氣象台の協力を受けて処置すること」

との指示あり、南方軍に課せられた氣象判断は極めて重大な責務となった。

台湾総督府氣象台長西村博士はサイゴンに進出し、日下部少佐と共に長期予報の作成に従事した。その結果、マレー東岸陸上予報・同海上予報が出され、その予報からすれば、七日が最適であり、八日の午後天候悪化、九日最も悪く、十日から回復するというものであった。しかし、一週間先の予報故、絶対視するには根拠薄弱であるとの理由で

「天候の関係よりすれば一日繰り上げを最も可とするも、予定日（八日）でも可なり。」

という意見をまとめ、夕刻参謀総長の名をもって関係方面に打電した。

十二月二日一四・〇〇、参謀総長は南方軍に対し軍機電報を發し、第三飛行集団は正式に、開戦は十二月八日という南方軍の命令を受領した。昭和十七年一月

七日、

「二五野氣」は集団氣象隊長の指揮を脱し、南方軍直轄部隊として、第十五軍の作戦区域担当となり広範なビルマ戦線に展開することとなった。

加藤隼戦闘隊長は「氣象班の予報は的確であった。所属隊員にご苦勞であったと伝えよ」と伝言されたという。

昭和十七年九月、大東亜全域の氣象部隊を整理統合し次の氣象連隊を新設した。

第二氣象連隊（満州 関東軍氣象隊、野戦氣象第五大隊、氣球中隊）

第三氣象連隊（南方 野戦氣象第一大隊本部、同第一、第二、第四中隊及び第二五野戦氣象隊）

第二二野戦氣象隊（比島 野戦氣象第二大隊本部及同第三中隊）

第四氣象連隊（他方面より一年余遅れ十九年二月改編）（支那 支那派遣軍氣象隊）

連隊本部の職能及業務区分
歩兵連隊とは異なり本部は通常兵站地に所在する。

主な任務 直属する航空軍に対し気象上の意見具
申、司令部命令に対し連隊としてその作命の発令、
傘下大・中隊への伝達指示及司令部への直接協
力。

所在航空及び地上諸部隊への直接協力、近接する
野戦気象隊、航空路部、船舶部隊への協力と近接
飛行場群への協力班派遣、気象中枢業務、総合気
象報の送受信、放送、直轄勤務隊の編成及び指揮
……等々多岐に亘るものであった。

昭和十八年二月の三氣連展開概要は次である。

【第一大隊本部スマトラパレンバン

第一中隊本部同メダン

第二中隊ジャワ、バンドン

連隊本部・材料廠・第三中隊昭南

第四中隊ビルマ、ミヨー

第二大隊、第六中隊ビルマラングーン

第五中隊本部、飛行場仏印サイゴン】

昭和二十年八月、

第一中隊海南島、第二大隊、第五中隊バンコッ

ク

第四中隊タイ↓仏印、第一大隊仏印ブノンペン

第二中隊仏印サイゴン、第三中隊ボルネオクチ

ン

第二大隊第六中隊展開予定馬來イポー

特別第七中隊クアラルンプール

第一四野戦気象隊ジャワ、スマトラ

復員昭和二十一年二月―七月一日。